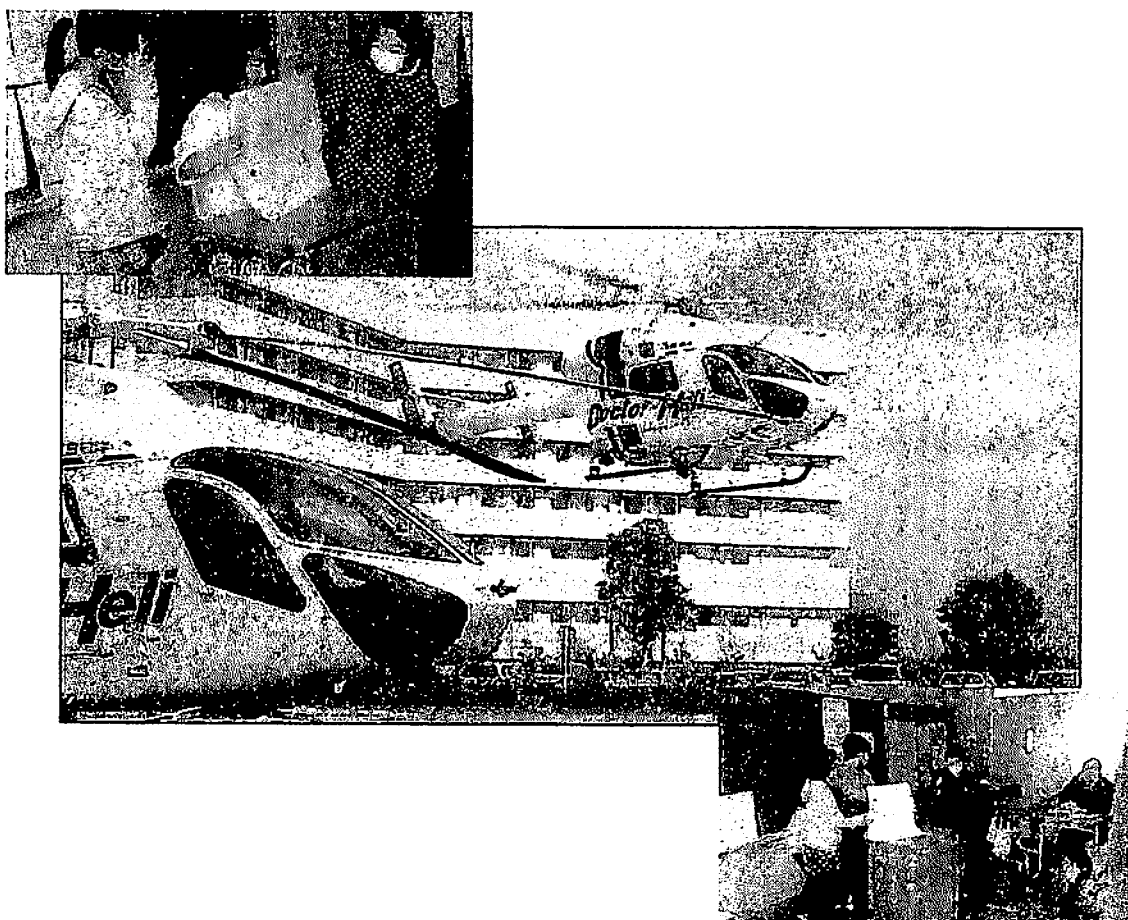


第67次印旛地区教育研究集会
(社会科教育・小学校)

「社会的事象に対して自分の考えを持ち、
それを示しながら、
主体的に学習を進めることのできる児童の育成」

～第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」の実践を通して～



成田市立公津小学校
溝口 聡

1. 研究主題

社会的事象に対して自分の考えを持ち、それを示しながら、主体的に学習を進めることのできる児童の育成

～第5学年 「情報化した社会とわたしたちの生活」の実践を通して～

2. 主題設定の理由

(1) 学習指導要領から、

本単元は、学習指導要領の以下の内容に基づいて設定したものである。

目標 (2)	我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展や社会の情報化の進展に関心を持つようにする。
(3)	社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。
内容 (4)	我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする。

この単元では、「情報化の進展が国民の生活に大きな影響を及ぼしていること」、そして「情報の有効な活用が大切であること」に関して、具体的な調査活動を通し、理解や考えを深めることを目的としている。そこで今回は、産業と国民生活の関連と、社会の情報化の進展の具体的な事例として「医療現場における情報ネットワークの活用」を取り上げた。

医療分野における日々の生活の中の困り感を、自分事として捉え、資料を調べたり、友達と意見を交換したりする中で、自分たちなりの解決策を導いていく。その一連のプロセスを行うなかで、子どもたちの思考を深め、よりよい解決策に主体的にたどり着くための手立てを探るために、本研究主題を設定した。

また、平成29年3月に告示された新学習指導要領の中では、「社会的事象の見方・考え方を働かせ、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次のとおり資質・能力を育成することをめざす。」とある。また、目標の(3)に「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度やよりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養う」とあり、これらはまさに本実践のねらいと一致する。

(2) 印教研社会科研究部研究主題より

①主題との関連

本研究は、印教研社会科研究部研究主題「よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習～自ら課題をみだし、自らの考えを表現できる児童生徒の育成をめざして～」を受けて設定している。

今回の実践では、学習の起点に「病院にかかるときに困った経験」を話し合うところを設定した。それぞれの家庭で、病院にかかる時に困った具体的な経験から、複数の学習課題を導き出す。例えば「病院の待ち時間が長い」「都合が合わず、病院に行きにくい。」「安心・安全な医療が受けたい」などの切迫感のある課題を、解決するための道筋を考え、調

べていく中で解消していく。また、一人で解決することが難しい課題も、友達と意見を交換し合い、多様な視点で見ることで解決に近づいていくだろう。そして、自分たちで導き出した「病院をよりよくする提言」を医療関係者や自分の家族に聞いてもらう経験は、「よりよい社会の実現に寄与する生きる力」を培うための意欲を高めるに違いない。

このプロセスを児童が主体的に進めて行くことが「自ら課題を見いだし、自らの考えを表現できる児童生徒の育成」につながると考え、本研究主題を設定した。

②先行研究より

第62次印旛地区教育研究集会 八街市立笹引小学校 相沢俊介 氏の先行研究より、「地域の政治への願いを話し合い、発表すれば、自分の考えを明確に持ち、社会へ参画する意識を高めることができるだろう。」とある。より良い八街市にするための方法を話し合い、その後専門家の話を聞くことで、その考えを修正し、より現実的・建設的な考えへの変容が見られている。本実践においても、家庭から出た医療現場への願いに立脚し、考えを深めていけるように、相沢氏の学習の流れを参考にして取り入れた。

(3) 児童の実態から

児童は、年間を通して、学習問題を立て資料を探して解決し、その結果を広め、そこから次の課題について考える、問題解決学習のプロセスを経験してきている。しかし、インターネットで簡単に大量の情報が手に入るため、必要な情報の精査ができなかったり、資料集で得た情報を、噛み砕いて十分に理解せぬままにノートに載せてしまう様子も多く見られた。そのような調べ学習を進めていくと、学習問題を自分の生活と結びつけて考えることが不十分になってしまう。そのため、学習の定着が、知識理解の分野にとどまってしまっており、自分の考えや行動の変容に結びついていく児童は少なかったように思われる。中学年の社会科の学習は、住んでいる地域や私たちの生活に地理的・心理的に近いものが多く、多様な調査活動や相手を意識した対話的な学習を多く持ってきたが、5学年の学習においては、座学が中心となることが多く、児童の学習意欲も低くなりがちであった。

また、アンケートの結果からは、7割を超える児童が調べ学習が好きだと答えているが、その手段としては、資料集の活用が84%、インターネットの活用が72%と多く、家族や専門家に聞いて解決を図ろうとしている児童はとても少ないことが分かった。このことも、相手意識を持った調査活動や、対話的な学習が減ってきていることを裏付けている。

この実態を受けて、もう一度社会科の学習を自分事として捉え、自分から社会に働きかけ問題を解決しようとする態度を育むことを考え、本研究主題を設定した。

3. 主題について

(1) 社会的事象に対して自分の考えを持つとは

医療という子供にとっても関わりのある社会的事象を取り上げる。

そして、保護者アンケートの結果を基に「病院にかかるとき困ったこと」を考えることや、調べていく途中にそれぞれの課題の具体的な事例を示すことで、児童一人一人が、自分事としてその社会事象を捉えることができるだろう。

切実感を持って、解決方法を考えることで、その社会的事象に対し、自分の考え（問題点の把握や自分なりの解決方法）をもつことができると考えた。

(2) 主体的に学習を進めることができるとは

児童の実態でも述べたように、本学級の児童は調べたことを無条件に受け入れ、それで問題の解決としてしまう様子が見られる。特に5学年の学習になってからは、調べる対象が身近な物から、空間的、心理的に離れたものによって変わっていったため、その傾向は顕著である。本研究では「主体的に学習を進める」と言うことを、

多様な意見に触れ、自らの判断で考えや解決方法を変容させながら、よりよい解決を図ること

と定義づけ、話し合いを通して考えを確認したり、変容させたりできるような手立てを考えていく。

3. 研究目標

医療分野における情報ネットワークの活用について、生活の中にある課題を強く意識して学習問題を立てることや、解決のための思考の流れを、思考ツールを使うことで明確に示しながら話し合いを行うことで、論点が整理されたり、考えが可視化されたりして、それぞれの課題を主体的に解決することができるかを明らかにする。

4. 研究の仮説

【仮説1】

地域資源の活用を工夫すれば、社会的事象を自分事と捉え、自らの考えを持ちながら学習を進めることができるだろう。

① 児童・保護者アンケートや具体的なエピソードから、医療現場の課題を見つける。

家庭で病院の利用について話し合い、その良さや課題をアンケート調査で把握する。また、身近な大人から、病院で困ったことなどの話を伺う。それらを解決するための方法を考えるという目的意識を持つことが、児童の意欲を高め、考えの道筋を立てやすくなると考えた。

② 関わりの深い病院や先進的な取り組みを始めた病院との連携

児童にとってなじみの深い成田赤十字病院や、情報ネットワークを活用した新たな取り組みを始めた千葉大学附属病院との連携をはかり、実際の医療現場で働く人と交流しながら、学習を進める。自分たちの提案を専門家や保護者に聞いてもらうという目的を持つことで相手意識を持って問題解決を図れると考えた。

【仮説2】

思考ツールを使って、自らの考えを自分の言葉で伝え合う学習の場を工夫すれば、物の見方や考え方が深まり、社会的事象に主体的に関わるだろう。

① Yチャートを使ったグループでの話し合いを設定し、意見の変容を追う。

Y字チャートをもとにグループで話し合いを行うことで、問題解決のための道筋がわかりやすくなり、主体的に話し合いを進めることができると考えた。学習の最初や調べている最中、医療関係者への提案後など、学習の各段階で話し合いを持つことで、児童の考えの流れが整理されたり、その深まりが可視化されたりすると考える。

また、グループを越えて、同じような内容を調べた児童で集まり、情報や資料の交換を行うことで、新たな気づきを促したり、より考えを深めたりする時間も設けた。

5. 研究の内容・検証方法

【研究内容】

- 身近な医療上の課題を、情報ネットワークの活用を通して解決する問題解決学習の教材化
- 自分の考えを周囲に示しながら、相手意識を持って、主体的に学習を進める態度の育成

【研究方法】

- 仮説検証法（質問紙法・授業の感想・Y チャート上での話し合いの様子と意見の変容）

6. 実践研究

（1）単元名 情報化した社会とわたしたちの生活 ～社会を変える情報～

（2）単元の目標

- 情報化されている医療現場に関心を持ち、情報ネットワークの活用について意欲的に調べようとしている。 【社会的事象への関心・意欲・態度】
- 情報ネットワークを利用し、必要な情報を共有することによって、医療サービスの向上が図られ、私たちの命や健康を守ることに役立てられていることを考え、適切に表現している。 【社会的な思考・判断・表現】
- 各種の資料やインターネットを活用したり、聞き取り調査をしたりして、医療現場における情報ネットワークの活用について必要な情報を集め、読み取っている。 【観察・資料活用の技能】
- 情報ネットワークが有効に活用され、わたしたちの生活を守ったり、便利にしたりしていることを理解している。 【社会的事象についての知識・理解】

（3）指導計画（全8時間扱い）

過程	学習活動と内容	時数
つかむ	○生活の中でネットワークを使って情報を手に入れた経験を話し合う。 ○保護者に実施した「病院についてのアンケート」の結果を見て気付いたことを話し合う。 ○病院で使われている情報ネットワークについて、調べる学習問題を作り、調べていく計画を立てる。 病院では、患者のために情報ネットワークをどのように活用しているのでしょうか。	1
調べる	○自分の選択した課題に対し、グループに分かれ、調べを進める。 ○調べた内容や考えをグループ内で報告しあい、考えや調べる方法を見直す。 ○調べてきたことをまとめ、発表の準備をする。 情報をフリップに端的にまとめ、詳細はノートなどを提示しながら発表する。	3
まとめる	○外部の講師を招き、自分たちの調べた解決策の提言を聞いてもらう共に、専門家の視点から、意見や補足説明を頂く。 ○他のグループの提言を聞き、医療現場の情報ネットワークについてまとめる。 ○保護者に調べたことを伝えるための新聞を作成する。	3

ひろげる	○情報ネットワークの他分野での活用を調べ、医療分野での利用の仕方と比較して、情報ネットワークとのつきあい方を考える。	1
------	--	---

7. 仮説の検証

【仮説1】

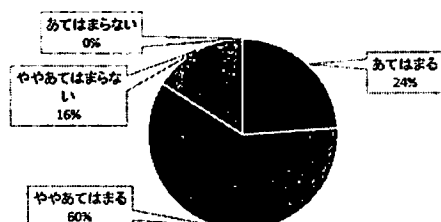
地域資源の活用を工夫すれば、社会的事象を自分事と捉え、自らの考えを持ちながら学習を進めることができるだろう。

【検証1】

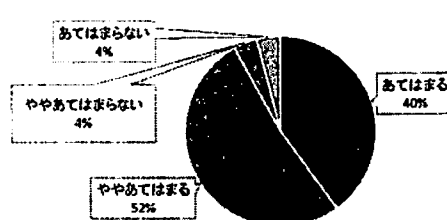
(1) 児童・保護者アンケートや具体的なエピソードから、医療現場の課題を見つける。

①質問紙法（事後）より、

④自分で課題を立て。調べ学習を進めることができましたか



⑦課題に対する解決策を見つけることができましたか。



上記のグラフの結果より、保護者や自分自身が感じている疑問についてアンケート結果から話し合い、「待ち時間を減らす工夫」「みんなの都合に合うための工夫」「病院の連携について」「安心して治療を受けるための工夫」の4つの課題を立てたことが、児童の意欲を引き出し、課題の選択や調べ学習への取り組みを促したと考える。

また、子供に身近な大人のエピソード（夜中に赤ちゃんに発疹、機嫌は良さそうだけど熱が少しある。病院に行った方がいいのか不安で眠れなかった」等）を紹介することで、児童は学習問題の解決に切実感を持ち、調べ学習の意欲が高まった。

(2) 関わりの深い病院や先進的な取り組みを始めた病院との連携。

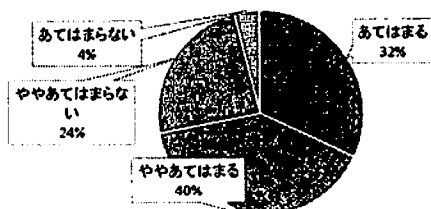
児童にとって身近な課題（病院で長く待った経験や不便な思いをした経験はどの児童にもあった。）を扱うにあたって、できるだけ生活圏内の病院と連携を考えたところ、成田赤十字病院に質問の受付を快諾していただいた。

すぐに児童の初期の質問を送り、返答をいただいた。児童は、自分たちの行動に、地域の病院が反応をしてくれたことに、大きな喜びを感じていた。同時にそれぞれの課題を自分たちの生活と結びつけ「成田赤十字病院の病院連携について調べたい」とか「日赤に停まるドクターヘリの姿を見たことがある。中を調べてみたいなあ」等、具体的な課題意識を持つことができたように思う。

また、単元の中頃に、情報ネットワークを扱った新しい試みを始めた千葉大学の教授を招き、それぞれのグループで調べてきたことを提案し、それに回答を頂くという時間を設定した。先ほどの赤十字の件に引き続き、専門家が自分たちの意見を聞いてくれるとなって、児童は意欲的に調べ学習や発表資料の作成を行っていた。

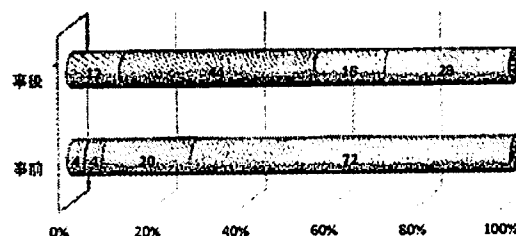
①質問紙法（事後）より

⑬竹内先生に自分の考えを聞いて
もらうことが嬉しかった。



③-4 関係者に話を聞きたい

□あてはまる □ややあてはまる □ややあてはまらない □あてはまらない



上記のグラフの結果のように、人前での発表等に消極的な児童が多い中で意識面では大幅な変容がみられている。

②児童の感想より

竹内先生に自分たちの考えを提案する授業の感想では多くの児童が、「考えを発表できて良かった」「自分たちの考えに実際の先生だから分かることをつけてしてもらえた」「竹内先生の話がわかりやすかった」等の感想が並んだ。

しかし、千葉大学の開発した情報システム「SHACHI」の説明の際には、児童にとって難しい概念が多く、理解することが難しかったようだ。

【仮説2】

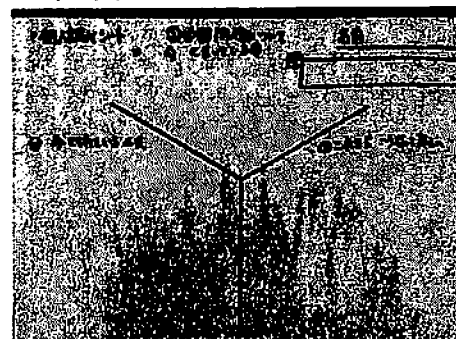
思考ツールを使って、自らの考えを自分の言葉で伝え合う学習の場を工夫すれば、もの見方や考え方が深まり、社会的事象に主体的に関わるだろう。

【検証2】

（1）Yチャートを使ったグループでの話し合いを設定し、意見の変容を追う。

児童達が自分の考えを出し合い、考えの道筋を立てながら調べ学習を進めるための支援として、Yチャートを用意した。Yチャートには、それぞれの学習課題毎に、①今困っていること ②今取られている工夫 ③これからこうなって欲しいの3点を記入させ、児童が調べ学習を行う際の指針とした。

（写真 Yチャートの見本）



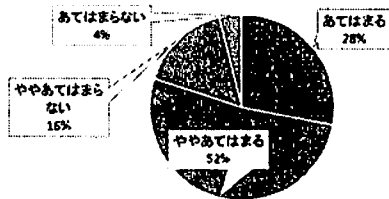
まず個人で資料を探し調べながらYチャートを埋めていき、その後付箋紙で自分の考えを示しながら、グループで意見を交換し、グループでの考えをまとめた。グループでの意見交換は調べ学習開始時と、調べ学習の途中、そして竹内先生への提案後の3回行い、その都度付箋紙の色を変え、児童の思考の流れや深まりを可視化できるように配慮した。

また、意見交換の際には、気づきや追加の意見を赤色のペンで自由に付け加えながら活発に意見を交換し、グループの調べていく方向性やまとめ方まではなしあうことができた、

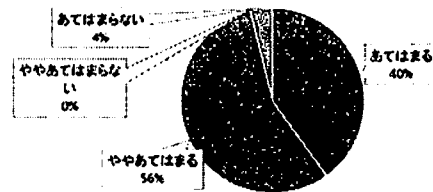
また、児童は、それぞれが違う資料集を持っており、インターネットでの調べ学習でも一人一人固有の資料を見つけている。そのため、グループを越えた情報交換を行うことで必要としていた資料と出会い、Yチャートを完成させる児童もいた。

①質問紙法（事後）より

⑧Yチャートを使うと、考えを整理して書きやすかった。



⑨Yチャート上で付箋を貼りながら話し合うことで、みんなの考えがよく分かった。



「Yチャートを使うと、考えを整理して書きやすかった」に関しては80%、「Yチャート上で付箋を貼りながら話し合うことで、みんなの考えがよく分かった」に関しては96%の児童が肯定的に答えている。子供達の意識の上では、今回の実践においてYチャートが有効であったことが分かる。

②児童のYチャート上の意見の変容と感想の分析

今回の提案では主体的に学習を進めることを「多様な意見に触れ、自らの判断で考えや方法を変容させながら、よりよい解決を図る」としている。今回の仮説の検証のために以下の評価規準と具体的な項目を設定した。

評価規準	具体的な項目
A 調べた内容と現実を結びつけて、多面的、实际的に考えることができる。	○自分や仲間の考えが実現可能か判断でき、実現のための方法を考えることができる。 ○自分や仲間の考えのメリット・デメリットに気づくことができる。 ○保護者の願いを具体的に解決できる方法を多面的に考えることができる。
B 友達と意見を交流し、より良い考えに、高めようとすることができる。	○友達と自分の意見を比較して発言できる。 ○友達の考えに関して、適切なアドバイスができる。 ○問題をしっかりと把握して、的確な解決方法を考えることができる。
C 調べたことを基に自分なりの考えを持つことができる。	○課題をしっかりと把握し、解決のために調べることができる。 ○自分なりに筋道の立った解決方法を考えることができる。

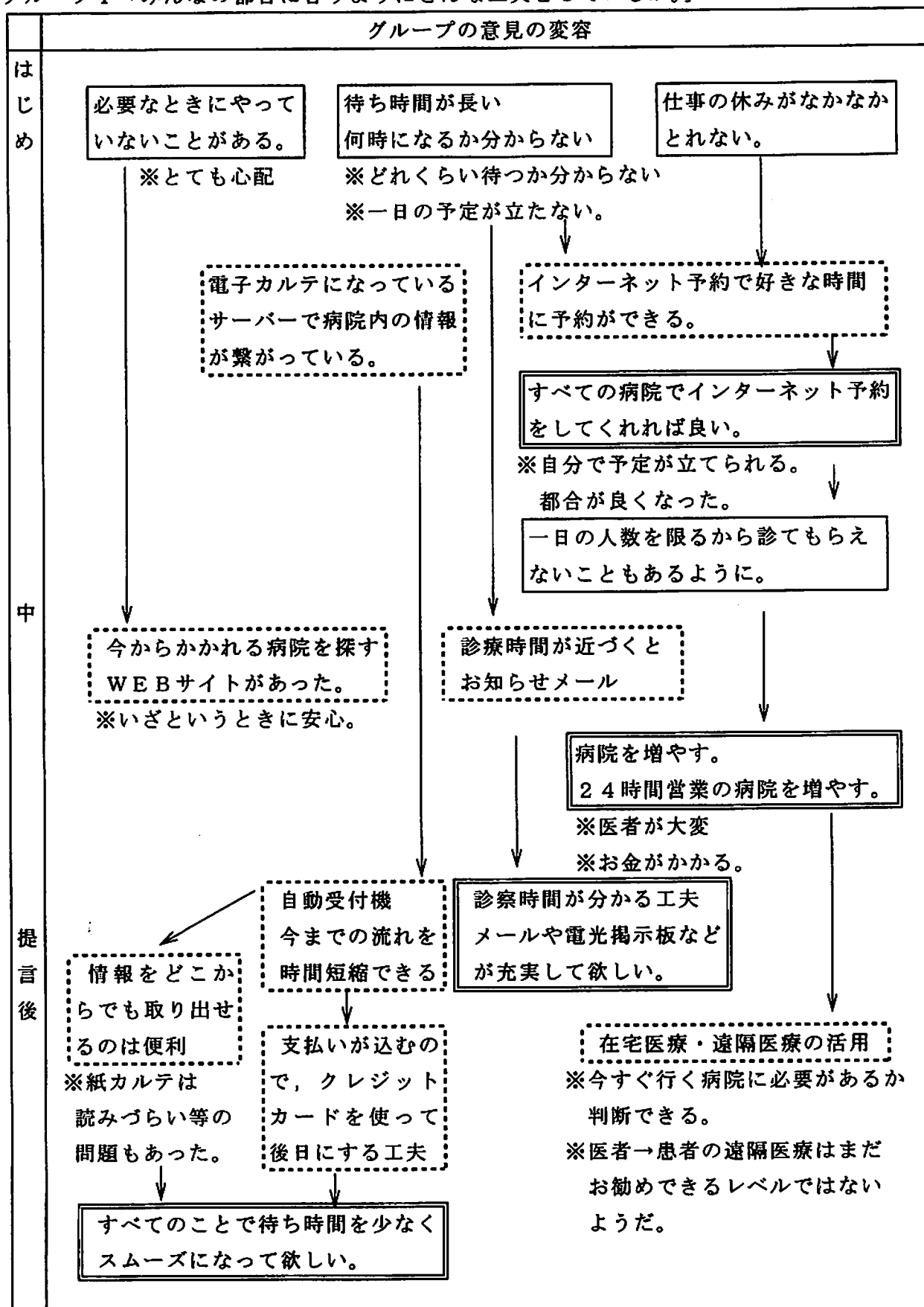
上記の具体的な項目をYチャート上の書き込み、児童の毎時の感想、そして作成した新聞に当てはめ、検証を行う。また、Yチャートの流れの図は以下のように記載する。

※以下「今困っていること」を の囲い。「今取られている工夫」を の囲い。

「これからこうなって欲しい」を の囲いで表す。

また、児童からの追加の考えの書き込みは※で標記する。

○グループ1「みんなの都合に合うようにどんな工夫をしているか。」



○抽出児での検証 A児の場合。

A児はまじめに学習に取り組み、グループのリーダー的存在である。しかし、まじめであるが故に、考えが固定化しがちな面もある。

はじめ	中	提言後
考え ○仕事の休みが取りづらくて、なかなか病院に行けない。 C	考え ○インターネット予約で好きな時間に予約を取れる。自分で予定が立てられるから都合がいい。 B ○すべての病院で実施して欲しい。 B	考え ○大体の時間が分かる工夫（メールや掲示板）をもっと広めたい。 A ○電子カルテを効率的に使って、すべての段階で待ち時間を減らして欲しい。 A
感想 みんなの都合に合わせるために、いろいろな工夫がありそうだった。でも実際にみんなの都合に合わせるのは難しい。	感想 みんなの都合に合わせるための工夫があまりなかった気がする。まだ見つけていないだけ？	感想 どこでも（受付・診察・検査など）進みやすくするために、どの場所でも情報を共有することになった。電子掲示板で伝えるのは便利。調べるのが楽しくなってきた。
評価	身近な生活体験から課題を持ち、解決しようとしている。「中」において、インターネット予約について解決方法としているが、友達から「人数制限されるから不便」と返され、思考の流れがいったん止まってしまった。後半の調べ学習で、他の解決方法として、待ち時間・診察時刻の表示と電子カルテによる時間短縮に興味をうつつし、病院に行きやすくする工夫を多面的に考えることができた。	

○抽出児での検証 B児の場合

B児は熱心に調べ学習に取り組み、ノートをきれいにまとめている。素直な性格で、自分の考えを書き加えたりすることは少ない。

はじめ	中	提言後
考え ○待ち時間が長い。 C ○家族の都合に合わないことが多い。 C	考え ○紙のカルテから電子カルテに変わった。 B →紙の時代より情報のやりとりが早くなった。 B →いろいろな場所から同時にみることができる。 B ○インターネット予約で時間の都合が付くようになった。 B	考え ○お金の支払いまでスムーズになってとても楽になったと思う。 A ○病院を増やす B ○24時間やっている病院を増やす。 B ○在宅医療に期待。 A
感想 ○病院は待っている時間が長くて大変。家族の都合に合わないことが多い。（休みがもらいにくい）	感想 ○紙のカルテをベルトコンベヤーで運んでいた時より、電子カルテで便利になっている。 B ○インターネット予約がこんなにあるなんて知らなかった。 B	感想 ○病院が早くなったのは分かった。いろんなところに工夫があって、調べるのが楽しい。在宅医療とかすごいと思う。 A

評価	待ち時間が長いことに課題意識を持ち調べ始めた。昔のカルテの実物を見たり、その運ばれ方を調べたりする中で電子カルテの良さに気付き、それを一貫として調べ続けることができた。また、インターネット予約の限界に気付いた後、もう一度「病院を増やす」「24時間営業」という考えに立ち戻ってしまった。友達からの反論もあり、在宅医療による、見守りなども考えていたが、最後まで、その考えは根深く残った。
----	---

※他の抽出見出しの検証や、他のグループの話し合いの様子は、資料編の方に載せています。

児童のYチャートや感想を分析していくと、多くの児童で同様の意見の変容が見られた。特に、提言をまとめる際にグループの意見の集約が行われ、そのメリット・デメリットをみんなで考えることで、個々の調べた内容が共有化され、そこで新たな課題が生まれるような様子が多くのグループで見られた。また、その過程で多面的、多角的な見方をして、考えを広げていく様子も多くの児童で見られた。

8. 成果と課題

<成果>

- 自分たちの生活から学習課題を設定したことで高い意欲を持って調べ学習や表現する活動に取り組んだ。
- 千葉大学医学部の竹内先生を招いたことにより、専門家に聞いてもらうという相手意識を持って学習に取り組むことができた。また、自分たちの意見を、補足修正して頂くことで新たな視点を獲得ことができ、考えを変容させることができた
- Yチャートを個人の調べ学習やグループでの話し合いで使ったことによって、思考の流れを可視化することができ、考えの筋道を立てることができ、調べる内容を方向付けることができた。また、話し合い毎に付箋紙の色分けを行うことで、グループの意見の変遷や生まれてくる課題をわかりやすく表すことができ、個人の考えを深めることに役だった。

<課題>

- 学習のゴールを保護者への報告にしたが、個人での家庭での取り組みにしたため、児童の意欲が高まらず、達成感にも乏しかった。報告会のような形式をとれば、意欲の持続や相手意識の持続が図れたのではないかと考える。
- 具体物を用意したり、竹内先生と事前に打ち合わせたりしたが、やはり情報分野のキーワード（クラウド式、オプティイン・オプティアウト等）が難しく、理解できない児童もいた。結果、最新の情報共有システムについてはその利点を実感することが難しかった。
- 検証の方法が主観が多く入ってしまうような形であったと思う。最初から検証の視点をもっと明確にして、語句や発言などの量的分析を行うことができれば、より客観性を持たせることができたと思う。

第67次印旛地区教育研究集会
(社会科教育・小学校)

「社会的事象に対して自分の考えを持ち、
それを示しながら
主体的に学習を進めることができる児童の育成」

～第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」の実践を通して～

資料編

成田市立公津小学校
溝口 聡

目次

- 資料① 児童アンケート集計 ①(情意面 事前事後比較)
 ②(児童の学習過程の評価)
 ③(手立ての有効性)

- 資料② 社会科だより (保護者アンケートの結果)

- 資料③ 知識の構造図

- 資料④ Yチャート分析

- 1 ①グループの検証 抽出児童 C児での検証
- 2 ②グループの検証 抽出児童 D児での検証
- 3 ③グループの検証 抽出児童 E児での検証
- 4 ④グループ・⑤グループの意見の変容

- 資料⑤ 児童の学習物

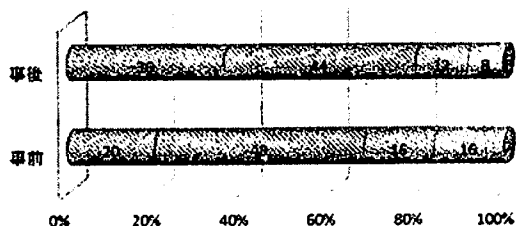
- ① 各グループのYチャート
- ② 社会科新聞 児童の作品例

資料①

児童アンケート集計①(情意面 事前事後比較)

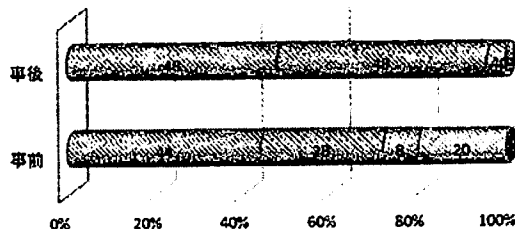
①社会科の学習は好きですか

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない



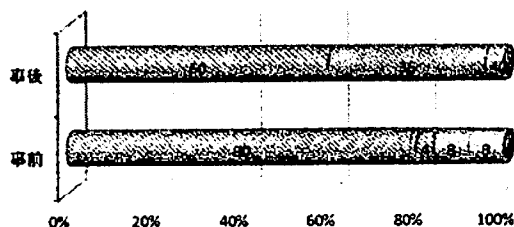
②社会の調べ学習は好きですか

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない



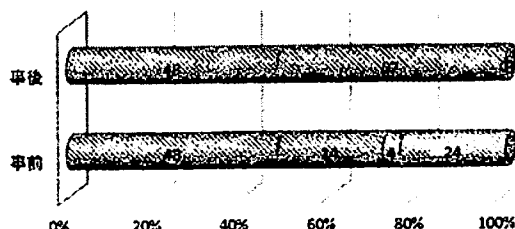
③-1教科書で調べたい

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない



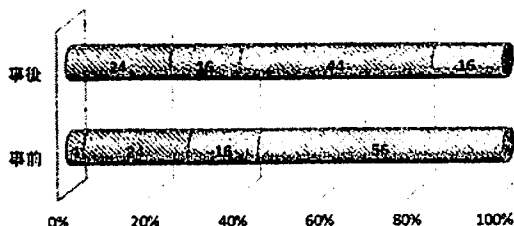
③-2インターネットで調べたい

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない



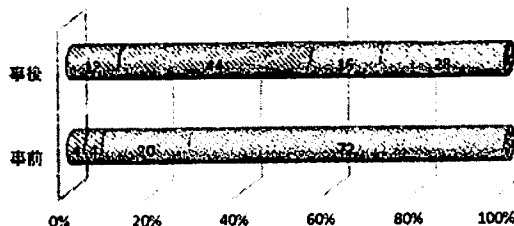
③-3お家の人に聞きたい

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない



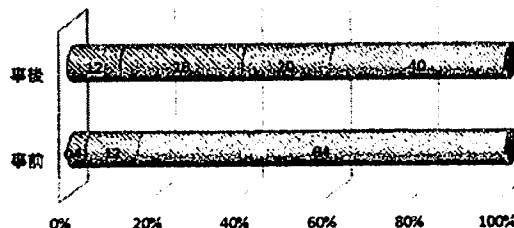
③-4関係者に話を聞きたい

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない



③-5関係者に問い合わせたい

☑あてはまる ☐ややあてはまる ☐ややあてはまらない ☐あてはまらない

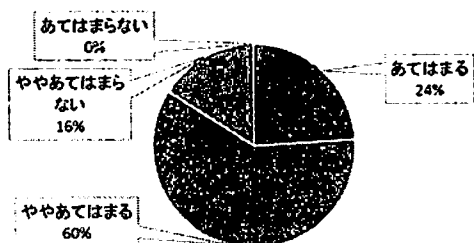


①「社会科の学習は好きですか」②「社会の調べ学習が好きですか」の事前事後の比較から、意欲の高まりが読み取れる。特に調べ学習においては95%を超える児童が肯定的に感じていることが分かった。

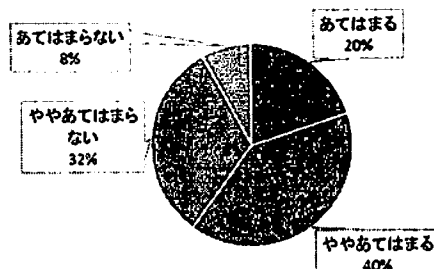
また、調べる方法については、教科書やインターネットがやはり身近で人気であるが、この実践を通して、お家の人や専門家に話を聞いてみたいと感じる児童が増えた。特に③-4「関係者に話を聞きたい」は事前は肯定的な回答が8%に過ぎなかったのが、事後は56%と大幅に増えている。

児童アンケート集計②(児童の学習過程の評価)

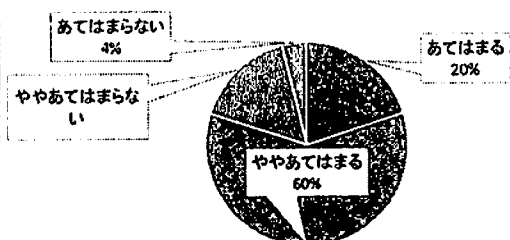
④自分で課題を立て、調べ学習を進めることができましたか



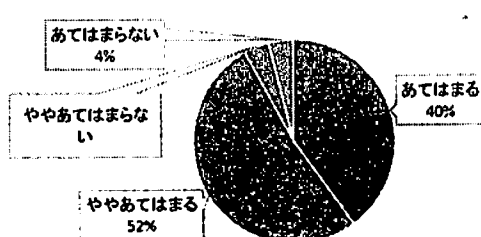
⑤写真やグラフなどを見て、問題をつかみ、学習問題を立てられましたか。



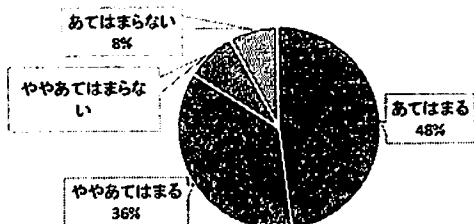
⑥専門家に聞いて、教えてもらうのは役に立ちましたか



⑦課題に対する解決策を見つけることができましたか。



⑧新聞にまとめ、保護者に調べた内容を伝えることができましたか。



④「自分で課題を立て、調べ学習を進めることができましたか。」に関しては85%の児童が肯定的に、⑦「課題に関する解決策を見つけることができましたか。」に関しては92%の児童が肯定的に答えている。このことから、児童は本実践を通して、自分で課題を立てたこと、そしてその課題を解決したことに自信を持っていることが分かる。

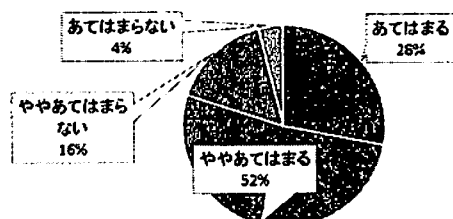
⑤「写真やグラフなどを見て、問題をつかみ、学習問題を立てられましたか。」に関しては他のグラフよりも肯定的な意見が60%と少ない。保護者の問題意識を聞いたアンケートの結果から、一人一人の学習課題を設定したが、そのグラフの読み取りになれておらず、自分1人では実感を持って結果を読み取れなかったことが原因かと考える。

また、⑥「専門家に聞いて、教えてもらうのは役に立ちましたか。」に関しては、80%ほどの肯定的な回答にとどまった。児童の授業の感想から「言葉が難しかった。」「楽しかったけどよく分からないところもあった。」という意見も見られたので、それが原因の一つかと思う。

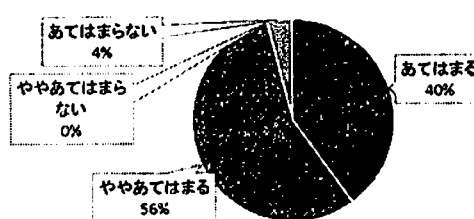
⑧「新聞にまとめ、保護者に調べた内容を伝えることができましたか」は84%の児童が肯定的に答えている。多くの児童は熱心に取り組むことができたが、生徒指導上の課題で保護者に伝えることができなかった児童も、数名いた。

児童アンケート集計③(手立ての有効性)

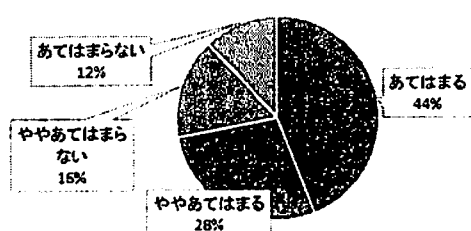
⑧Yチャートを使うと、考えを整理して書きやすかった。



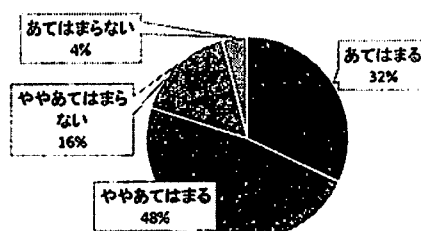
⑨Yチャート上で付箋を貼りながら話し合うことで、みんなの考えがよく分かった。



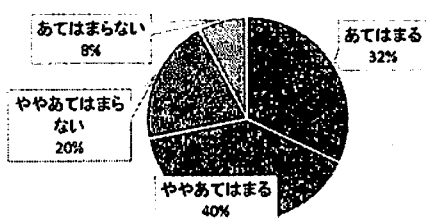
⑩Yチャートを参考にするのと調べたことをまとめやすかった。



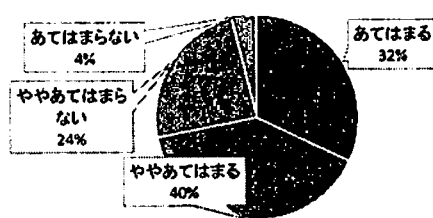
⑪授業後のイメージマップの方が、自分のイメージをたくさんかけた。



⑫イメージマップで関係を整理することができた。



⑬竹内先生に自分の考えを聞いてもらうことが嬉しかった。



⑧「Yチャートを使うと、考えを整理して書きやすかった。」については、8割の児童が肯定的に答えている。しかし、「あてはまる」と自信を持って回答した数は28%と他の項目より、明らかに少ない。社会科に限らず、思考ツールを授業に取り入れようと考えてはいたが、このアンケートの結果を見ると、まだまだ、思考ツールに慣れておらず、普段から使う道具という意識にまでは育っていない様子が分かる。

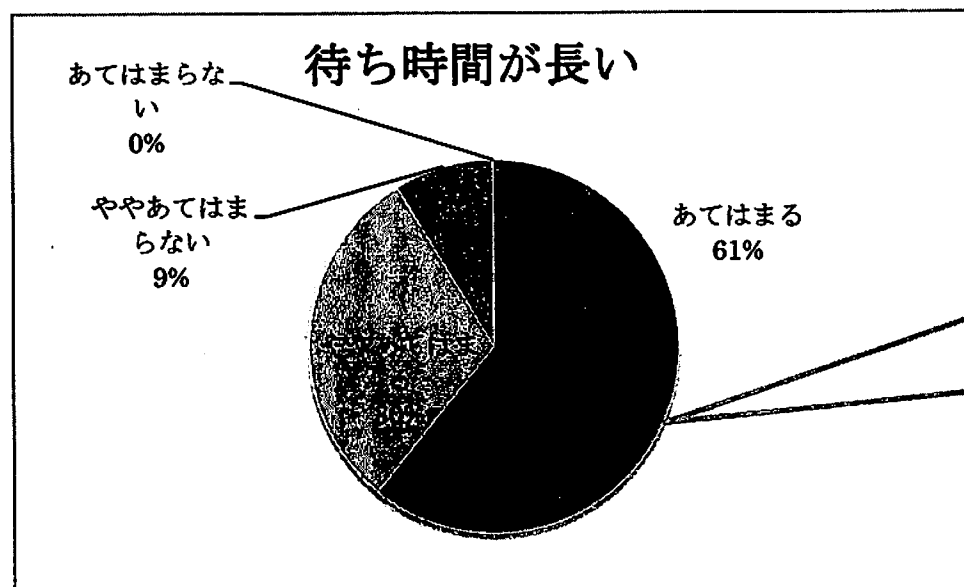
⑨「Yチャート上で付箋を貼りながら話し合うことで、みんなの考えがよく分かった。」⑩「Yチャートを参考にするのと調べたことをまとめやすかった。」の項目では、それぞれ、96%、82%が肯定的に答えた。実際に思考ツールを使って操作してみると、自分や友達の考えが目に見える形で残っているのは、思考を深める上でとても有効であったようだ。

⑬「竹内先生に自分の考えを聞いてもらうことが嬉しかった。」に関しては、72%の肯定的意見にとどまる。自分たちが調べてきたこと、提言という形で千葉大学の竹内先生に聞いて頂いた。そして、それを受けて、現場だから分かることや、最新の医療情報等のアドバイスを頂いた。自分たちの発表を外部の人に聞いて頂く機会が、これまであまりなかったのが原因かと考える。

社会科だより

皆さんのうちの人に病院についてアンケートを取りました。

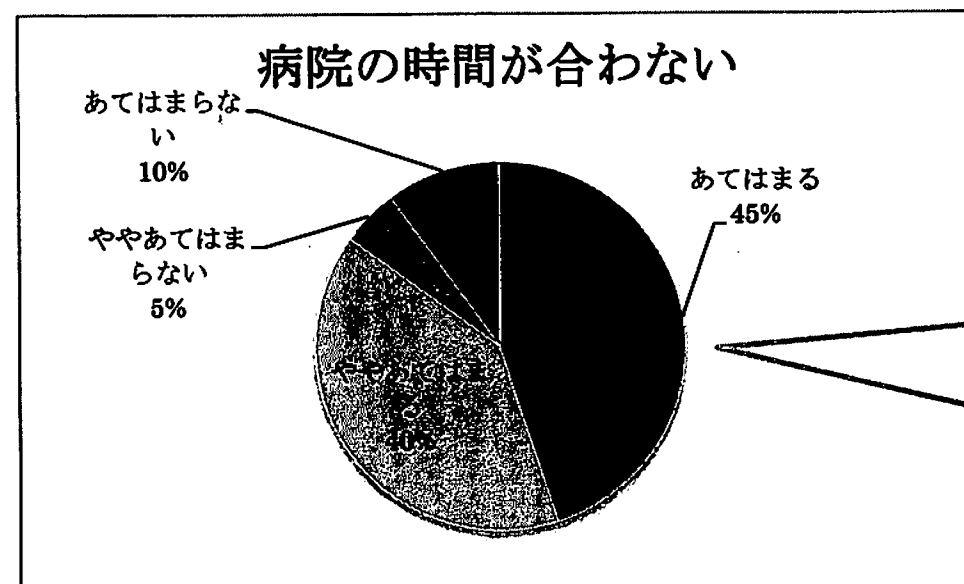
病院で困ること トップ5



ほとんどすべての人が、待ち時間の長さを感じています。
皆さんのアンケートでも、時間がかかって大変だったという意見が目立ちました。

やはり一番多かったのが「待ち時間の長さ」でした。

検査などが入るとさらに時間がかかります。



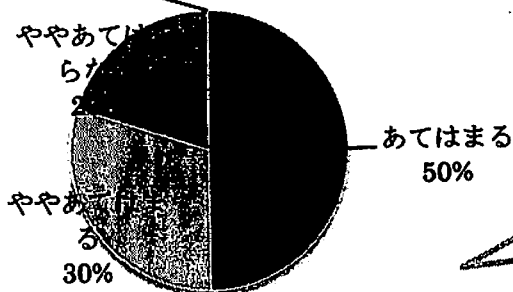
こちらでも80%をこえる人々が困っていることがわかります。近所の病院がしまっていて、わざわざ遠くの病院に行くことも。
特に夜間は、病院が見つからず、困った経験のある方もいました。

仕事が休めない。夜、急に熱が出てしまったなど。病院に行きたくてもなかなか行けない時も。予約できたらいいのにと意見が多かったです。

大きな検査や手術は

あてはまらない 0%
あてはまる 50%
ややあてはまらない 20%
ややあてはまる 30%

大病院でしてほしい。

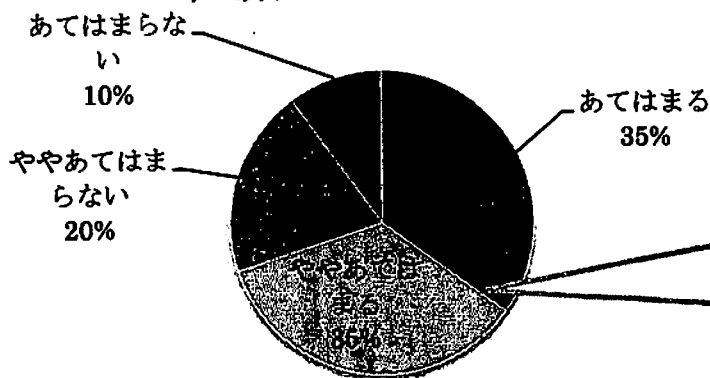


かかりつけの病院が安心なはずなのに、多くの人が、大きい病院での検査・手術を希望しています。先生も入院・手術したのは大きい病院でした。なぜだろう？

また、救急車はどうやって行先の病院を決めるのだろうか？

80%もの人が、大きい病院での手術を希望しています。

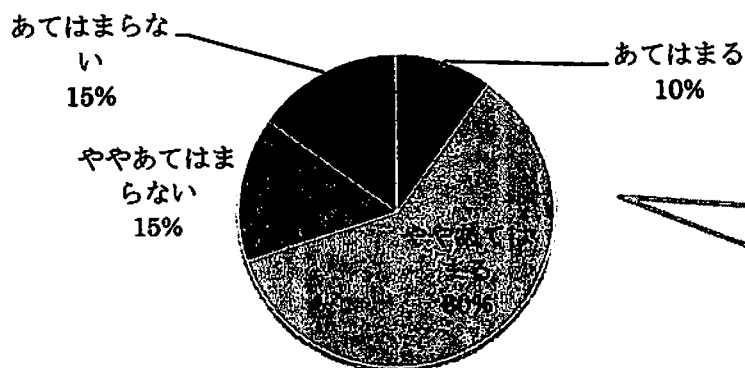
医療ミスが不安だ



時々ニュースで「薬を間違えた」とか「患者さんを取りちがえた」などの医りようミスが知らされます。どんな治りようを受けているのか、どんな薬を使っているのか。医師からしっかりと説明を受けておきたいものです。

また、医療ミスに不安を感じている人も多いことがわかります。

健康について、気軽に相談したい



自分の体や病気について、いろいろと相談したい人は、70%にもなります。

お年寄りやにん婦さんなど体は心配だけど、なかなか病院まで行けない人も多いんじゃないかな？

自分の病気やこれからの治療についてなど、詳しく説明してほしい、話を聞いてほしいことがわかります。

昔と比べてよくなったこと。

1	ネット予約で病院内の待ち時間が短くなった。
2	インターネットで予約ができるようになったこと
3	スマホで予約をとれる病院もある。
4	総合病院の会計が自動精算機で便利になった。
5	待ち時間も少なくなったし、予約もできる病院が多くなって便利
6	対応が良くなった。
7	医療費の負担が200円になった。
8	ネットで予約ができるようになった。
9	ネット予約や診療予定時刻を教えてくれるので、病院で待たなくてもよくなった。
10	インフォームドコンセントが広がってきており、昔より詳しく説明してくれるようになった。
11	患者への対応が良くなった。
12	病院の雰囲気がいさぐさで明るいものになってきた。
13	スマホなどで予約できるところが多くなった。
14	医療費が安くなり通いやすくなった。
15	先進医療が進んで助かる人々が増えた。
16	インターネットで予約できるようになったところ。
17	病院から処方箋を薬局にFAXできて、薬局の待ち時間が減った。
18	会計自動支払機ができて、とても早く会計をすることができた。
19	小さな医院はWEB予約を取り入れているところもある。
20	初診以外なら病院に行かなくてもスマホで予約ができる。

昔と比べて変わらない、悪くなったこと

1	予約して行っても待ち時間が長い。
2	午後から受診したいと思っても、朝早くに予約を取りに行かなくてはいけない。
3	かかりつけの病院は朝早くから並ばないと夜遅くの診察となってしまう。(10時→21時半)
4	急に熱を出したりすると病院を探すのが大変。(特に夜間)
5	手軽に通えるようになって混雑するようになった。
6	カルテの電子化によって、モニターしか見ていない医師と向き合ってくれる医師に分かれた。(医師事務作業補助者などを使いながら患者と向き合う環境を)
7	全国的に足りない科(例えば耳鼻科や皮膚科など)をもっと増やしてほしい。
8	待ち時間が長く、大きい病院だと検査するだけで大変です。
9	いろんな病院や科に回されて、なかなか診察が進まないことがあって大変でした。科や病院同士で連絡してくれればもっとスムーズに進んだはず。
10	WEB予約は決まった人数まで到達すると締め切られる。
11	大きな病院は紹介状が無いと受診できなかったり、初診料に何千円もかかる。
12	スマホで予約しないとみてくれない。定員になったら断られる。

など、様々な意見が出てきました。

ご協力いただいた方々、ありがとうございました。

資料③ 知識の構造図

獲得させたい
概念

大きな病院を中心とした医療情報ネットワークは、医療の質やサービスを向上させ、患者の健康や生命を守るために役立てられるなど、私たちの生活に大きな影響を与えている。

学習問題

病院では、患者のために情報ネットワークをどのように活用しているのでしょうか。

考えさせたい
内容

大きな病院では、情報ネットワークを活用し、受付、診察、会計などの待ち時間を短くしたり、わかりやすくしたりしている。

大きな病院では、電子カルテの導入によって院内に情報ネットワークを整備し、医療の質を高めるとともに、患者の利便性向上に役立てている。

大きな病院を中心に医療ネットワークが整えられ、地域内の医療の質やサービス向上や救急救命に役立てられている。

情報ネットワークを活用した遠隔医療によって、医療機関の少ない地域の人々が診察を受けられるようになっている。

おさえた
用語・語句

・情報ネットワーク

・電子化・カルテ
・個人情報

・特定機能病院
・かかりつけ医
・医療ネットワーク
・シャチ

・遠隔医療

予想される
まとめ

電子カルテ等院内の情報ネットワークや、シャチのような大きな病院を中心とした医療ネットワークが、医療の質やサービスを向上させ、患者の健康や生命を守るために役立てられるなど、私たちの生活に大きな影響を与えている。

資料④ Yチャート分析

1 ①グループの検証 抽出児童 C児の場合

○抽出児での検証 C児の場合。

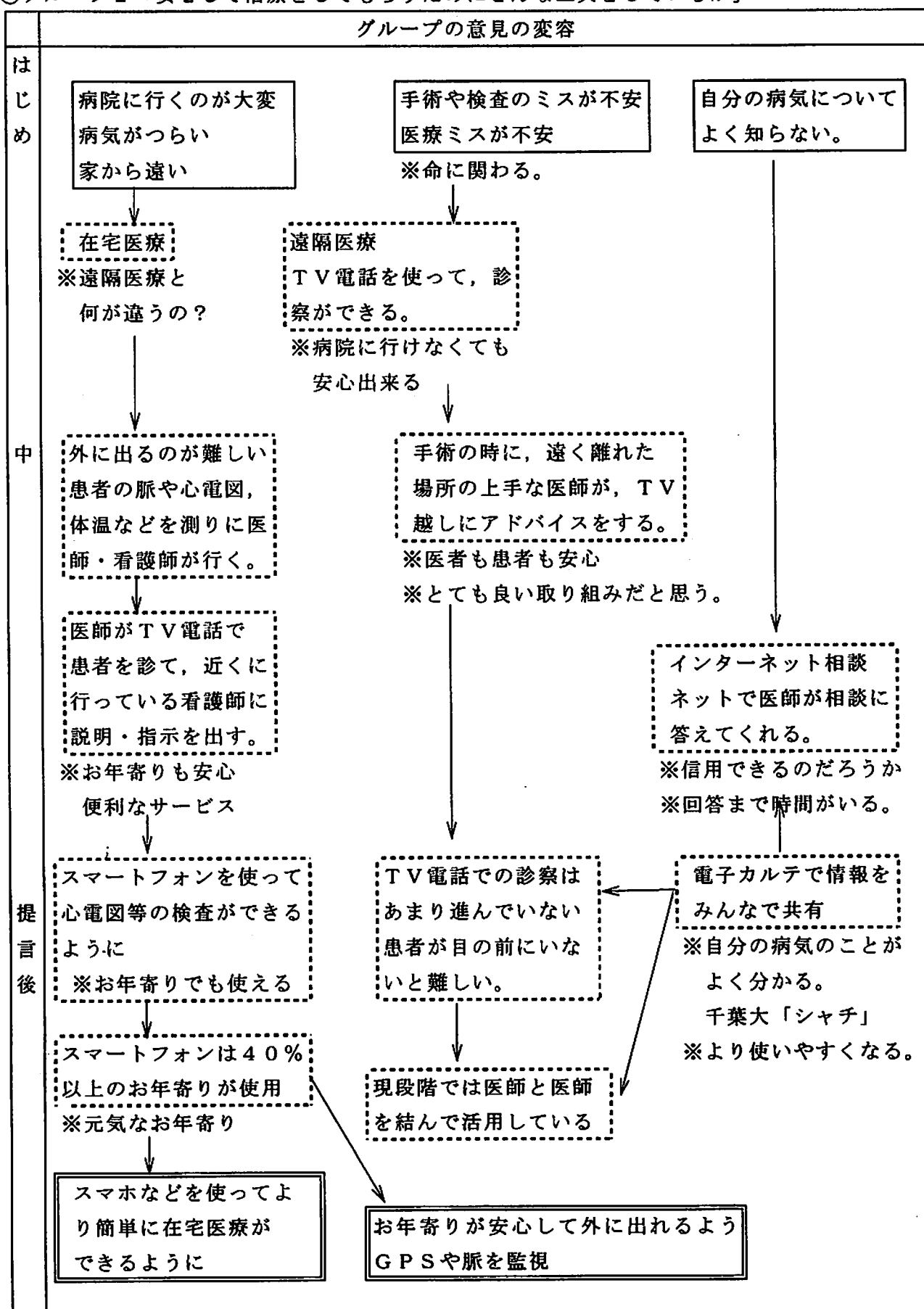
C児は、学習に消極的であり、全体への指示を聞き逃すことが多い。その一方、パソコンやインターネットには興味が高く、いろいろなことを知っている。

はじめ	中	提言後
考え ○急な熱など、病院に行きたいときにやっていないときがある。 C	考え ○今すぐかけられる病院を探せるWEBサイトがあった。これでいざというときに安心 A ○インターネット予約は一日の人数を限る。診てもらえないときがある。 A ○病院の中は情報ネットワークで繋がっており、電子カルテが共有されている。 B ○総合病院を大きく。 C	考え ○紙のカルテはかいた人以外には読みづらかったりすることもあるらしい。電子カルテはみんなが分かるように。 B ○遠隔医療はまだ難しいらしい。早く実用化されて欲しい。 A
感想 ○病院はとても時間が掛かるし、退屈。 ○パソコンを使って便利にすることができるのではないかな。調べたい。	感想 ○電子カルテについて調べた。いろいろなところが、ネットで繋がっていることが分かった。図で整理していくのが楽しかった。	感想 ○みんなの意見を聞いて分かったことが多かった。自分たちで調べて、解決できて良かった。 ○便利にするためには、大体の時間がわかることが大切。
評価	○最初、急病のときどうすれば良いかを考えて、インターネットを中心に調べ、今すぐかけられる病院を探すサイトを見つけることで解決することができた。また、教師の提示した電子カルテの中身に強く興味を持ち、電子カルテについて調べることができた。途中、インターネット予約の限界について調べ、みんなに紹介したところ、多くの人の考えを変容させた。自身もその後、人数が多くて診てもらえない状況を解決しようと「大型の病院」という考えと「遠隔医療」という考えにたどり着いた。積極的に他の人に意見を発信し、多くの考えを広げることができた。	

C児のように普段あまり積極的で無い児童も、インターネットを使って自由に調べられたり、自分の考えが他者に影響を与える場面だったりすると、積極的に調べ、発言することができていた。

2 ②グループの検証 抽出児童D児の場合

○グループ2「安心して治療をしてもらうためにどんな工夫をしているか」



○抽出児での検証 D児の場合。

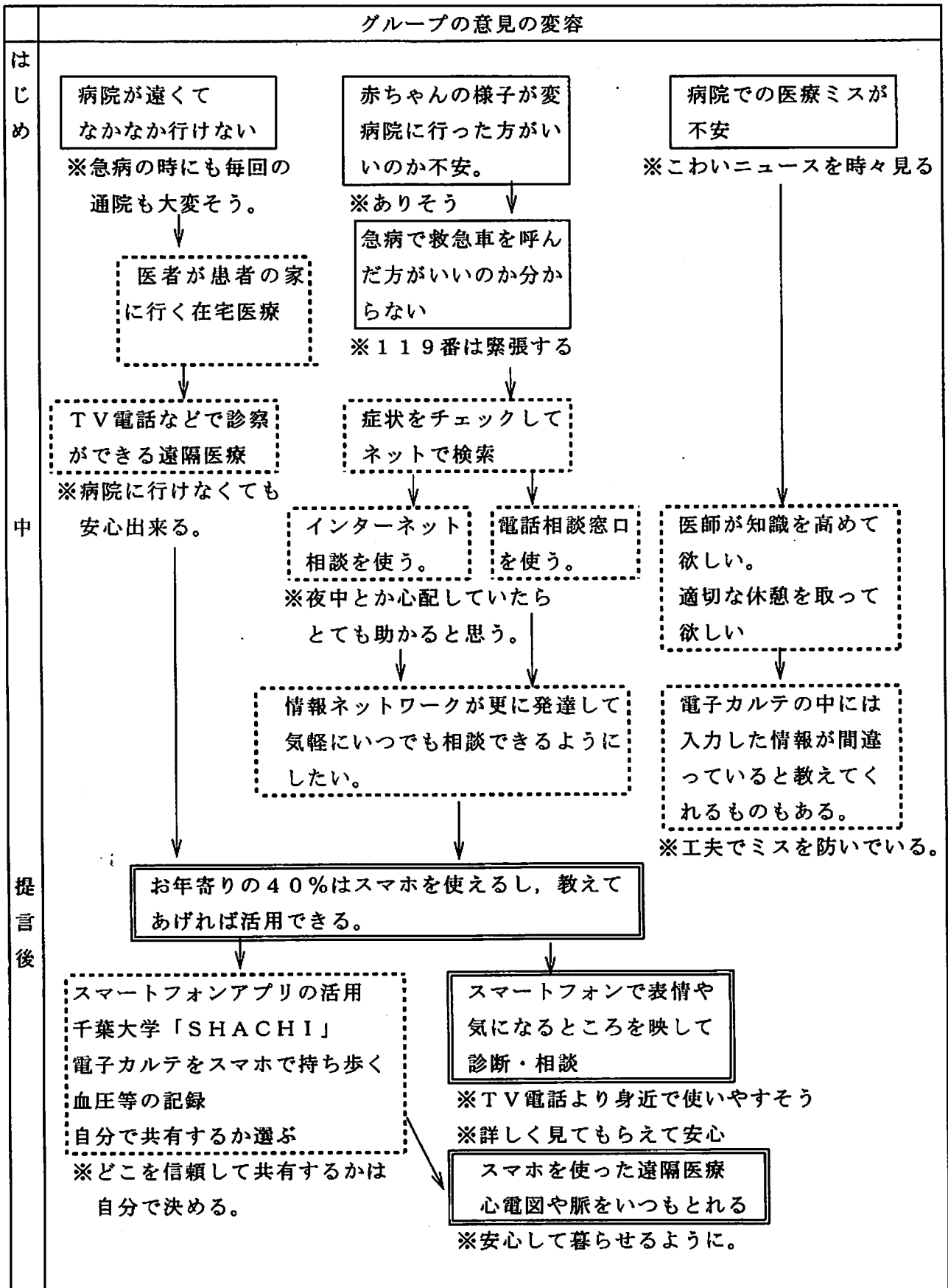
D児は、積極的に調べ学習に取り組み、発言もしっかりと行うことができる。

はじめ	中	提言後
考え ○家から病院が遠くて、心配でもなかなか病院に行けない。 C	考え ○遠隔医療 テレビ電話を使って診察ができる。 B ↑病院に行かなくてもいい。 ○手術の時に遠く離れたプロが医師にアドバイスを送る。 B ↑医者も患者も安心出来る。	考え ○TV電話での診察は実はあまり進んでいない。患者が目の前にいないと難しい A ○在宅医療の研究が進んで欲しい。より楽に簡単に A ○スマートフォンを使って、心電図などの検査ができるかも。 A ○お年寄りが元気。より身近な道具で安心を。 A
感想 ○安心して治療を受けられない、今困っている人のためにインターネットでどういうことをしているのか気になる。 ○インターネットで病気の相談はできないのかな	感想 ○もう少し家で調べたいと思った。遠隔医療と在宅医療は似ているけど、やる目的は違う。	感想 ○病院側も安心して治療を受けてもらうために工夫をしている。 ○遠隔医療や在宅医療で患者は安心出来ている。病院に行けない人のためにいろいろな工夫がされているのと感じた。 ○自分が調べたこと以外のことでも知ることができた。
評価	○病院に行けない人たちへのサービスに興味を持って、調べを進めた。途中、遠隔医療と在宅医療の間で混乱が見られたが、グループで話し合って解決していた。その後、家庭でも調べを進めたり、進んで仲間に助言を加えたりと積極的に学習を進めた。提言後、TV電話を使った遠隔医療があまり有効で無いことを知り、スマートフォンを使った在宅医療の可能性について考え、まとめることができた。	

このグループでは、話題の中心が、遠隔医療、在宅医療となっていた。離れたところで医療行為を行うという点でよく似ていたため、しばらくは混同して語句が使われており、話し合いの中でも混乱が起きていた。D児たちが中心となって話し合いを行い、基本的に在宅医療は家で治療を受けること。遠隔医療は離れたところでTV等を使って医療行為を行うことと定義づけてからは、話し合いがスムーズに進んでいた。竹内先生から「お年寄りの40%はスマホを使っているし、教えれば誰でも使えるようになる」「千葉大学でもスマホのアプリを使って、電子カルテを共有したり、体調を自分で管理したりするアプリを開発している」等の助言をいただき、この先の医療について自分たちなりに考えを広げることができた。

3 ③グループの検証 抽出児童E児の場合

○グループ3「安心して治療をしてもらうためにどんな工夫をしているか」



○抽出児での検証 E児の場合。

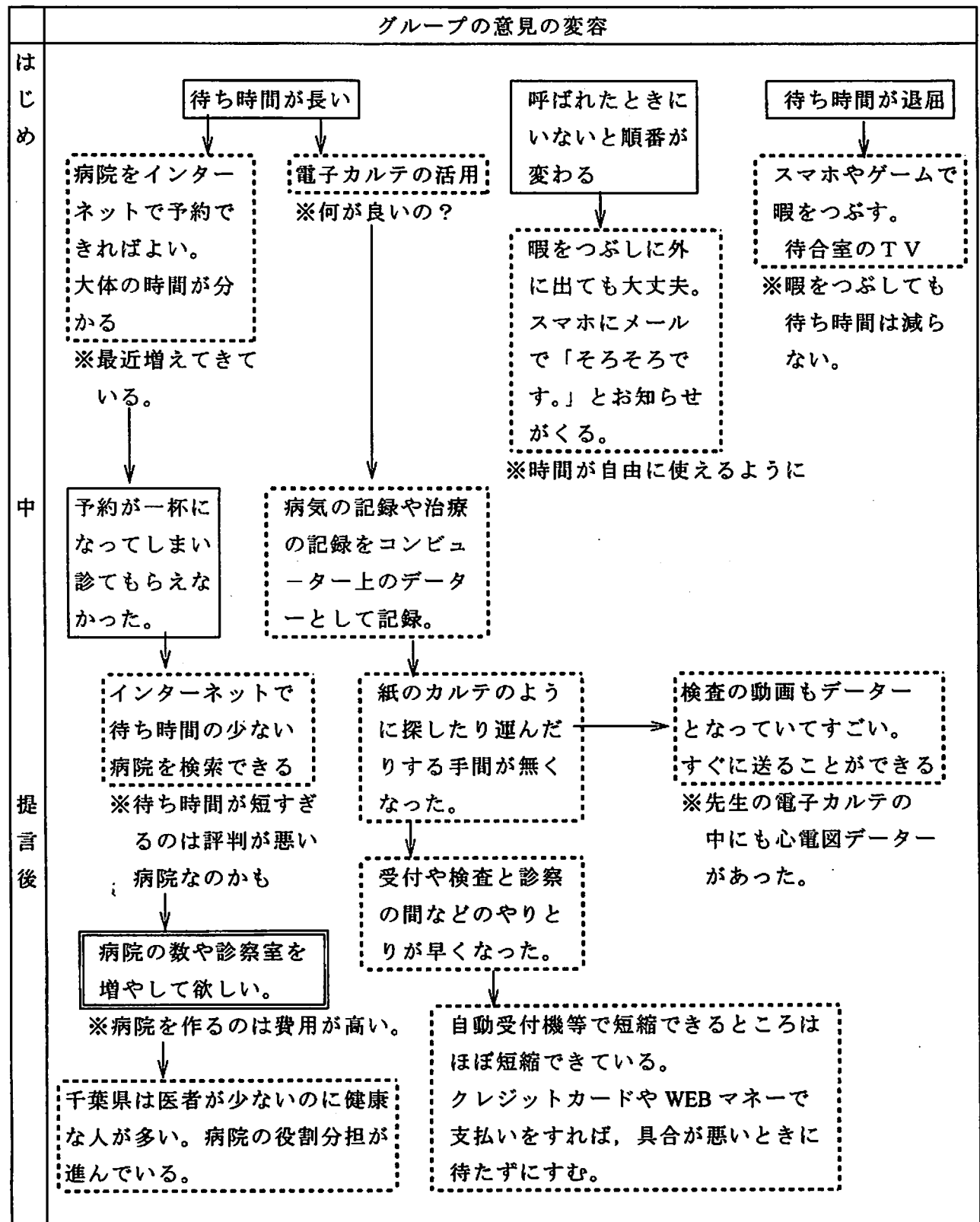
E児は気分の浮き沈みが大きく、学習に興味を示すと意欲的に活動をするが、課題を把握しなかったり、退屈であったりすると課題に取り組むことが難しくなってしまう傾向がある。

はじめ	中	提言後
考え ○夜に急に熱が出たときなど、救急車を呼んだ方がいいのか分からない。とても心配。 C ○赤ちゃんの例とか、夜の急な発熱とか、ありがちなことだと思う。 C	考え ○まずは症状をチェックする。そしてインターネットで検索すると、対策が出てくる。 B ○インターネット相談や電話相談窓口などを利用すれば安心出来る。 B	考え ○スマートフォンなどで、患者の表情や気になるところを映して、医者に診断してもらう。今晚どうすれば良いか等教えてもらうことですごく安心出来る。 A
感想 ○みんなが安心して病院にかかるための工夫について、気軽に相談できるようにどうすれば良いか頑張って調べてみたいです。	感想 1人で心配していないで、相談するのが良いことが分かった。インターネットでどうすれば良いか調べられるし、電話相談もできる。	感想 いろいろな県情報が集まっていたので、私たちの周りでは、どんな相談窓口があるのか、しっかりと調べたい。病院にかかるとき安心になると思う。
評価	具体的場面「赤ちゃんの様子がいちと違う。心配だけど病院に行く決心がつかない」「子供が夜、急に高熱を出した。朝まで待つべきかどうか。」などを考えさせることで、切実感を持って調べ学習に取り組むことができた。インターネットで相談することを考えて、「インターネット相談」や「電話相談窓口」を解決方法とした。しかし、インターネットで情報を集めたため、いろいろな県の相談窓口が集まってきてしまい、「今私たちが利用できる」という観点が抜けてしまっていた。提言後は、竹内先生から聞いた「おとしよりの40%はスマホを利用している」というデータから、スマートフォンの活用に向け、表情や患部を映しながら診察することでより診察の精度をあげるという解決方法にたどり着いた。	

グループ③は「安心して治療をしてもらうためにどんな工夫をしているか」というグループ②と同じテーマで調べ学習を進めた。このチームは個々がそれぞれ違った視点から調べ学習を進め、それぞれについて意見を交換しながら進めていた。明らかに情報ネットワークと関係ない方向に調べが進んでいた児童もいたが、話し合いを通して、軌道修正することができていた。また、千葉大学の「SHACHI」というスマートフォンアプリの説明をしっかりと理解してその良さに気づける児童もいた。子供達は、現段階でも医療相談の窓口が多いことに気づき、それを必要としている人が多いということを考えることができたようだ。

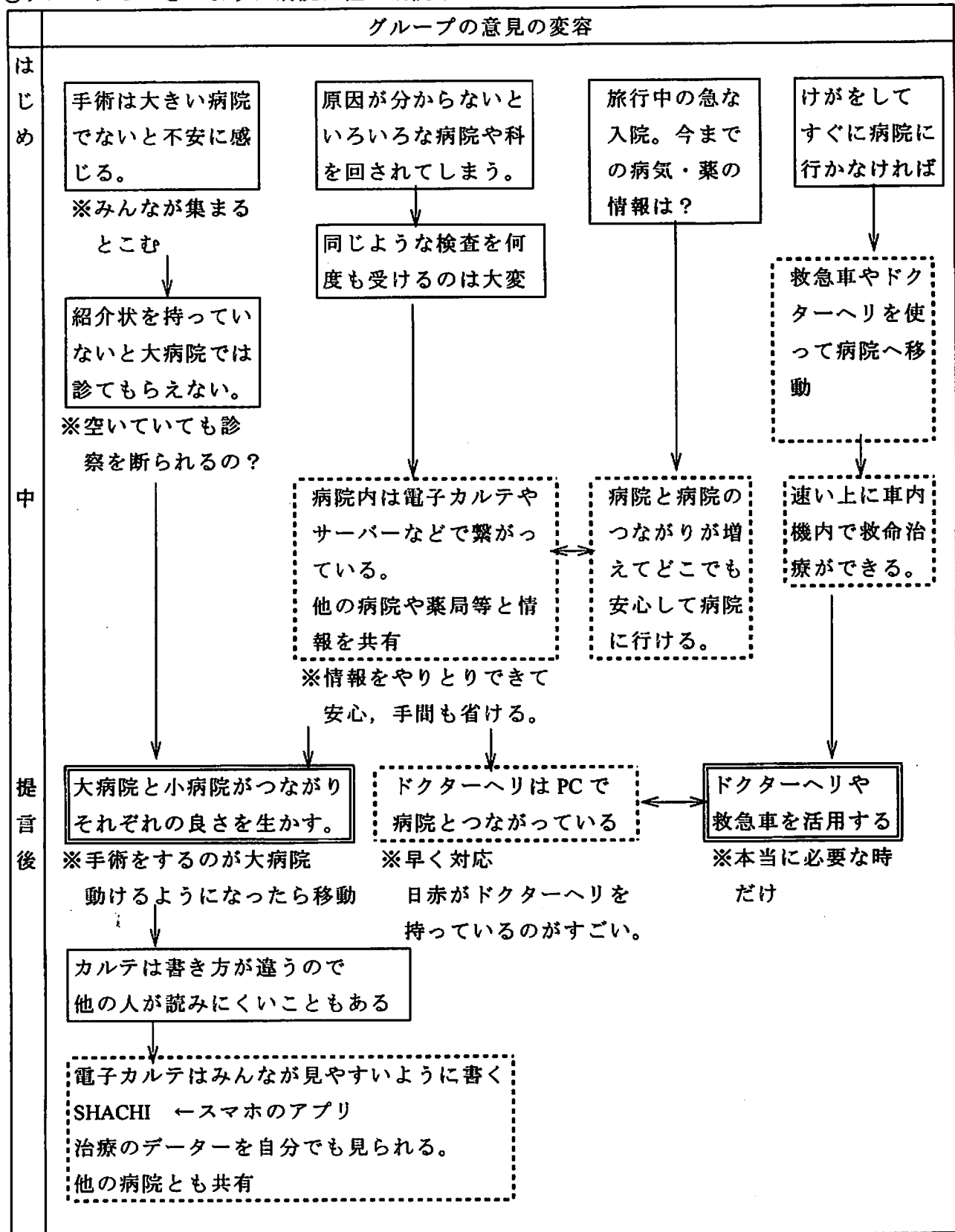
4 ④グループ・⑤グループの意見の変容

○グループ4「待ち時間を短くする工夫について」



グループ4は待ち時間を短くする工夫の中で特に電子カルテを中心に話し合いが進んだ。電子カルテや紙カルテの実物に触れることによって、電子化された良さに気付くことができる。また、インターネット予約を解決策の一つとしてあげたが、予約で一杯になってしまう現状から、「病院の増置」に考えが向かってしまい、すっきりと解決できなかった。

○グループ5「どのように病院は他の病院などにつながっているのだろうか」

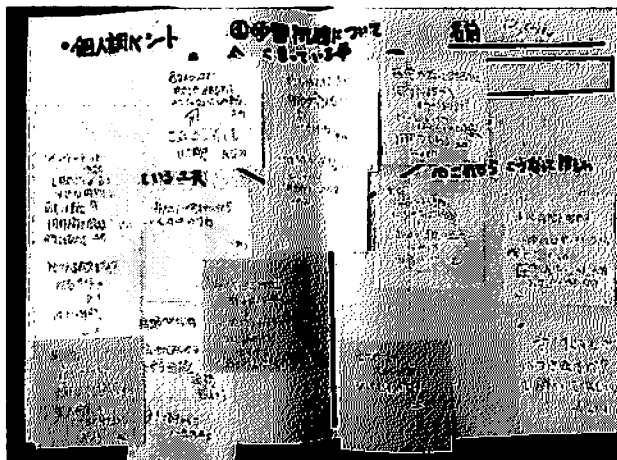


グループ5は「どのように病院は他の病院とつながっているのだろうか」という病院間の連携を調べていった。他のテーマと違い、児童がイメージしにくいテーマだったので教師の「心臓の検査で病院や科を何度も回された体験」や「旅先で肺炎になって急遽入院した体験」などを伝え、具体的に困る場面を想像させた。また、紹介状のシステムも最初是否定的な児童が多かったが、竹内先生のそれぞれの良さという考えで、納得していたようであった。

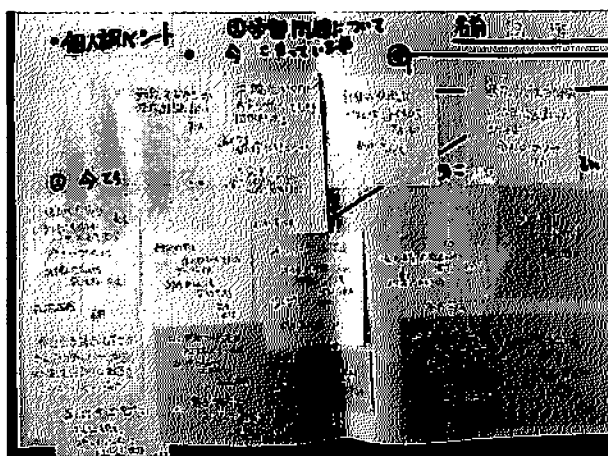
資料⑤ 児童の学習物

①各グループの Y チャート

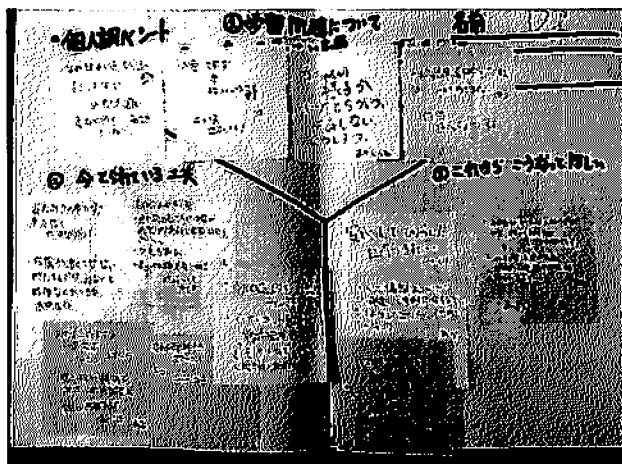
1 グループ



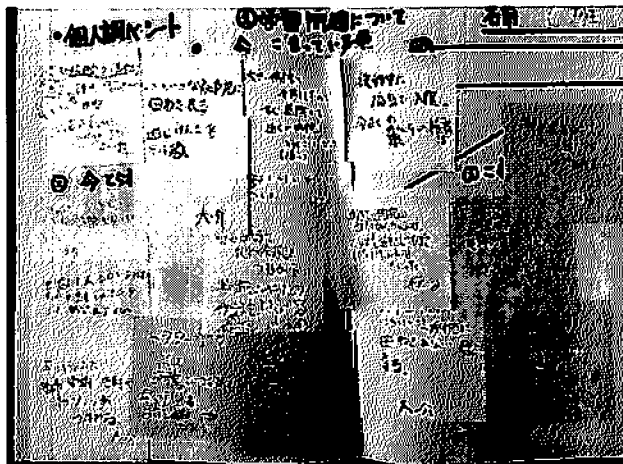
2 グループ



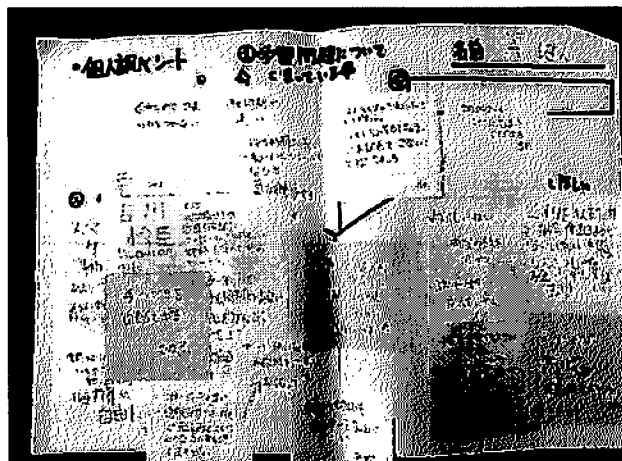
3 グループ



4 グループ



5 グループ



分析の際にはそれぞれの付箋紙を
時系列に整理して関係性をみて
つなげて整理した。

⑤ E児

安心、安全	① 今聞っていること	② 医療ミス	③ 病院に行かない方がいい	④ 救急車を呼ぶ方が いい	安心して治らうとしてもためにどんな工夫をしているか？
⑤ この調剤箱	① 医療ミス 。電子カルテで、薬の分量を まちがひないようにする	② 病院に行けないがわからな い時 。電話相談で、ネットでも 調べたりする	③ 救急車を呼ぶ方がいいが かつない時 。ネットをみて調べてみる	子どもがいると、口にも いって、下痢、アトピーなど あはれつらい	⑥ これからの準備 。在宅医療、ネットも、 気をつけるようにはなる 。いつか 相談するようにな っていく。
⑦ 病院の人から	⑧ 病院の人から	⑨ 病院の人から	⑩ 病院の人から	⑪ 病院の人から	⑫ 病院の人から